

「格調の低い国会での防衛論議、もうこの人たちに任せてはおけない」

最近の国会での防衛論議は聞くに堪えないものがある。

防衛大臣が無能であるとして、言葉尻を捉えてそれを追及し、そのような無能な大臣を選んだ総理の指名責任にまで波及させて、民主党政権の危うさを国民に印象付けようとの狙いがあるのだろう。だが今は、防衛大臣の知識度テストなどで、大事な時間をつぶしている場合ではない。

防衛問題で、国がやらなければならないことは山ほどある。

中国の軍事増強に備えた南西諸島の防衛、北朝鮮の弾道ミサイルへの対処、沖縄を焦点とした米軍との共同体制の改善等など、どれも国会で審議し、法を定めて基本を作らないと出来ないものばかりである。

第2次世界大戦直前の英国の国会で、自国の安全に無関心な国会議員を前にしてチャーチルが痛烈な皮肉を述べたという逸話が残っている。

チャーチルはヒットラーの拡張政策に危機感を持ち、国防の必要性和軍事力の強化を言い続けていたが、当時のチェンバレン首相は宥和政策を採っていたため、逆に過激な危険思想とみなされ提言は無視された。

これに憤怒したチャーチルは、「私は少年時代、見世物小屋に『骨なし怪物(ボーンレス・モンスター)』の看板を見て、是非観たいと親にねだったが観せてもらえなかった。そのことがずっと心残りだったのだが、今日この国会でかくも沢山の「ボーンレス・モンスター」を見ることが出来たと皮肉った。

ヒットラーの英国侵攻も間じかに迫っていた1940年5月、結局宥和政策ではヒットラーの野望を抑えきれず、チェンバレンに代わってチャーチルが首相兼国防相に就任して何とか国難を乗り切った。

チャーチルは、その回想録で、「政治家に必要なものは国家の危機を先見洞察する力であり、戦争に至ればあらゆる犠牲を払っても勝利をつかみ国家の生存を保たなければならない」とその決意を述べている。

今のわが国の国会をチャーチル式に皮肉れば、「能無し大臣(ブレインレス・ミニスター)」を与党の議員が群がって攻め立てている構図であり、攻めている野党議員も、「ブレインレス・セネター(コングレスマン)」のようである。

わが国の危機管理体制の現況を見ていると、チャーチルが危惧した大戦直前の状況に似ている。対外脅威としては、ミサイル防衛や島嶼防衛、テロ対策など改善強化すべきことが多いし、国内の防災対処でもインフラ整備が急務である。

目下国家財政逼迫の中だが、どうやってこれを進めるかが大きな課題になっている。

一つの案として、政府紙幣などを利用して国防・防災の大型公共事業を計画して需要を増やし、経済回復をはかりながら国力の強化を進めることを唱える人もいる。

今わが国に求められている国会での国防論議は、そのようなことをしっかりと議論して法制化をはかる事ではないだろうか。

「ブレインレス・ミニスター」や「ブレインレス・セネター(コングレスマン)」ばかりでは、取り返しのつかない事態になることが懸念される。

かつてのイギリスにはチャーチルがいた。国家の非常時に、自信と勇気と信念を持ってチャーチルが下した決心と行動について、ここで多くを語る必要はないと思うが、今わが国で誰がその役をやってくれるのだろうか。その人を探すのが急務である。